

ニュースを問う

■長良川のアユに異変

長良川河口堰(三重県桑名市)の運用開始から十五年。運用前に長良川だけで岐阜県全体の六割を占めていたアユの漁獲は激減し、体長は年々小型化している。それを補う放流はその場しのぎにすぎず、かえって問題点を見つめる目を曇らせた。

河口堰で小型化？

まるで別の魚のようだった。一つは海から遡上してきた数々のやせた天然アユ。もう一つは人工授精でつくられ、春に川に放流された二三センチのアユ。岐阜市世保西の自営業深尾卓夫さん(せまき)が九日に近くの長良川(岐阜県関市)で捕獲した。

河口から六十三キロ。この時期、中流まで遡上してきた天然アユの大きさは通常一〇センチ以上。しかし、深尾さんの漁の仕掛けにかかる天然アユは一日の解禁以降、三十七センチの小さな魚ばかり。四十年以上、漁をしている深尾さんは「これがアユか、と驚いた」。一方、人工アユは一〇センチ程度までプールで育てられ、川に放流される。一年で一生を終える同じ年魚のアユが川面の下で、これほど異なる状態で混在している事実には、驚きよりも不気味さを感じた。



山本 真嗣

(岐阜支社報道部)

清流の現実 直視し対策を



長良川中流の同じ場所で9日に捕獲された、海から遡上した天然アユ(小さな魚)と、春に川に放流された人工アユ(右端の大きな魚)＝岐阜県関市側島で

二十年間、長良川のアユの産卵を定点観測している岐阜市の生態学者新村安雄さん(あに)によると、長良川の天然アユはここ数年、小型化が顕著。新村さんは河口堰によって、川から汽水域と潮の干満が消えたことが原因と指摘する。

アユは九月中旬から十一月にかけて川の下流で産卵し、大型の魚ほど早い時期に産卵を開始。ふ化後のアユは、川の流れに乗ってエサの豊富な汽水域や海へ下る。河口堰の運用以前は、引き潮に乗る、早ければ一日で到達できた。

しかし、河口堰の上流は淡水、下流は海水に完全に分けられ、堰の上流から汽水域が消滅。引き潮もなくなった。大型魚の子は水温が高い時期にふ化するため体力の消耗が大きく、流れの緩くなった堰上流で死んでいる可能性がある。水温が下がった晩秋にふ化する小型魚の子孫だけが生き残り、毎年の連鎖で小型化が進んでいると推測する。

天然アユが小さくなるのと裏腹に増えたのが、人工ア

ユ。そのルーツも河口堰だ。長良川流域の漁協は河口堰建設の条件として補償金のほか、放流用の人工アユを安定生産できる施設を求めた。十五億円をかけ、関市に県魚苗センター関連事業所ができた。その技術は全国屈指で、木曾川や琵琶湖などさまざまな産地のアユを親に人工授精した魚を生産。岐阜県の川では、この人工アユを含む年間約百三十トンが放流されている。放流量は全国一だ。

だが、一九九二年に千三十トンあった漁獲は二〇〇四年には百八十トンにまで激減。天然遡上が好調だった昨年は三百二十トンまで回復したが運用前に遠く及ばない。県全体に占める割合も九二年の60%から〇八年には43%まで減った。

放流で問題隠れる

長良川下流の羽島市の漁師大橋亮一さん(あきら)の漁場も流れがよどみ、アユのエサの藻類が生える石を土砂が覆った。十年前には一日三百匹のアユがとれた漁場は年々細り、昨年は一匹もとれなかった。大橋さんは「川が魚を育む力が落ちてい」と肩を落すとす。

その構図は全国の川にも当てはまる。五〇年代以降、全国の川にダムが造られ、天然アユが遡上できない場所が増えるにつれ、琵琶湖産や人工アユの放流が急増。漁業法

で漁業権を持つ漁協に一定量の増殖義務が課せられることもあり、自然への免許符のように、ダム建設とアユの放流は表裏一体で進んだ。しかし九〇年代に琵琶湖産の稚アユを介して全国の川に感染症の冷水病がまん延。アユの漁獲は急減し、今も全国の川は不漁に苦しむ。

年魚のアユを毎年放流し続けることで、あたかも自然が残っているようにみえ、抜本的な環境対策は置き去りになっているように思える。本流にダムのなかった長良川も、河口堰建設によってほかのダム河川と同じ轍を踏み、川の命を育む力は確実に弱りつつある。小さなアユの姿はそれを如実に物語る。

「ニュースを問う」へのご意見は、新聞編集局「ニュースを問う」係へ。電子メールは、genron@chunichi.co.jp